OPINION
私はこう考える

岡村和子　警察庁科学警察研究所交通部交通科学第二研究室・主任研究官
1991年、お茶の水女子大学文教育学部卒業（心理学）、警察庁科学警察研究所交通部交通安全研究室に配属。2000年ロンドン大学Master of Philosophy(Transport)。
2002～2004年まで（財）交通事故総合分析センター研究第一課長。専門分野は事故防止、交通教育。
論文には『高齢者の安全とモビリティ』『若者は交通のコストをどう見ているか：交通教育のパイロット研究』(いずれも英文)などがある。

将来の運転者となる子どもに、チャイルドシート使用の習慣化を

6歳未満の幼児をクルマに乗車させる場合のチャイルドシート使用が法律で義務づけられたのは、平成12年4月からである。それまで15％だった6歳未満のチャイルドシート[※1]使用率は同年40％に上昇し、平成14年には52％となった。しかし、翌年から下がり始め、平成16年は47％まで減少している。子どもを持つ親たちのチャイルドシートへの関心が薄れていることを懸念した岡村さんは、12歳以下の子どもが乗用車同乗中に死傷した交通事故データ（平成13年から15年の合計）をもとに、『同乗中の子どもが死傷した事故から推測される運転者の行動特性』のレポートをまとめた。

同乗中の子どもの死傷者数は急増

乗用車同乗中の子どもの死傷者数は急増している。平成6年と比べると、平成15年の0～5歳と6～12歳の死傷者数は、第1当事者[※2]車両同乗中でいずれも1・6倍、第2当事者[※3]車両同乗中では0～5歳が10・6倍、6～12歳が9・3倍と増えている。この間、13歳以上の同乗中死傷者数がいずれもほぼ横ばい状態で推移していることから、12歳以下の子どもの死傷者数だけがいかに著しく増加しているかがわかる。「これらの事故の特徴を見ますと、1つは、30歳代の女性運転者による買物、訪問、送迎目的の事故が多いことです。2つめは、昼間の事故が多く、平日は女性、週末は男性運転者の事故が目立つことです。週末の場合は観光、娯楽などレジャー目的が多くなっています。週末も女性の運転は平日とそれほど変わらず、男性の運転による事故が週末だけ増えるということです。子どもの母親世代の免許保有率が高くなり、子どもを乗せて運転する機会が増えていることが背景に考えられます。女性が運転した事故では出会い頭事故が多く、男性では単独事故が多くなっています」。

死傷した子どもの半数程度しか適正に使用していない

死傷者数がこれほど急激に増えているにもかかわらず、あまり問題にならないのは、ほとんどが擦り傷や軽い打撲程度の軽微な怪我ですんでいるからではないかと、岡村さんは見ている。年齢層別の乗用車同乗中死傷者をみると、死傷した子どもの約98％は軽傷事故である。その理由として、後部座席同乗者は一般に重傷率が低いことに加え、子どもは高齢者に比べ負傷の程度が軽いことなどが考えられるという。こうしたことがチャイルドシート使用への関心が高まらない原因とすれば、問題だと岡村さんはいう。

「死傷した子ども（5歳以下）の52％しかチャイルドシートを適正に使用していませんでした。子どもを乗せていた運転者自身がシートベルトをしていなかったケースに限ると、チャイルドシート適正使用率は20％と低く、親への働きかけが重要なことがうかがわれます。将来、運転者となる子どもに、チャイルドシート使用やシートベルト着用を、早くから習慣化させることは、交通安全の基本である自分の生命、身体を守る意識を育てる確実な方法です」。

「3歳の娘がいますが、チャイルドシートを使用するだけでなく、後部座席で隣に座る場合は、自分も必ずシートベルトを着用しています。クルマに乗る人全員が、シートベルトや体に合ったチャイルドシートを正しく使うことが基本です。そうした意識を持つ親が少ないことも、チャイルドシート使用率低下の背景にあるように思います。また、同乗中に死傷した6歳以上の子どもについてみると、チャイルドシート使用率は10％未満と非常に低く、シートベルトの着用率も決して高くありません。

子どもにシートベルトを着用させるには、後部座席に乗る親も着用することが大切です」。そういう意識がクルマを利用する親に共有されると良いと、岡村さんは考えている。

※1 チャイルドシート使用率＝平成13年まではJAF（社）日本自動車連盟による調査結果　平成14年以降は警察庁とJAFによる合同調査結果
※2 第1当事者＝過失（違反）がより重いか、過失（違反）が同程度の場合は、被害がより小さい方の当事者
※3 第2当事者＝過失（違反）がより軽いか、過失（違反）が同程度の場合は、被害がより大きい方の当事者

VOICE
読者の声

ご愛読者の皆様へ：SJに対するご意見・ご感想をお寄せください！
SJ編集部では今後の紙面づくりの参考にさせていただくため、日頃よりご愛読いただいている読者のみなさまのご意見・ご感想をお待ちしております。SJへのご意見・ご感想は下記のメールアドレスへ。
sj-mail@ast-creative.co.jp　※弊紙に対する個別のご質問には回答できかねる場合がございます。あらかじめご了承ください。
※調査協力等のためにご連絡をさせていただく場合があります。

**★6月6、7日に「第5回全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会」が開催されました。
今月号のVOICEは大会に出場された教習所の方の声を大会前にうかがいました。**

指導員一人ひとりの技術を高めることで地域の安全に貢献できる教習所に

那須　滋（福島県）
タイヘイドライバーズスクール
管理者（校長）

私どもは今年初参加となるわけですが、「全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会」のことは以前から存じており、そのレベルの高さも聞いておりました。当校には42名の指導員がおりますが、日常の業務だけではマンネリになってしまいがちです。そこで、全国のレベルというものがいかに高いかを知ってもらうことが、良い刺激になると思い参加することにしました。

今回は、初めて全国大会に参加するということで、普段から特に熱心な指導を行っている指導員が二輪部門と四輪部門に2名ずつ出場します。4名の選手は一本橋、スラローム、ブレーキングなど競技種目に沿った練習を上司のアドバイスの下、早朝から行っています。また、昼間も教習の合間を縫って練習に励んでいます。選手のやる気に触発されて、選手だけでなく、まだ経験の浅い新人指導員も一緒になって練習する姿が見られます。これは、大会への出場で選手を含めた全指導員の技術向上を図りたい、という目標通りです。

指導員全体の技術の向上は、指導力の強化につながると考えています。これは、単に教習所の質を高めるだけでなく、高い技術を持った指導員が高いレベルの教習を行うことで、当校を卒業した初心運転者の方の事故率の低下につながることを期待しています。地域の安全に貢献することが、当校の理念である「安全で快適な交通社会の実現」に通じると思います。

全国の教習所との交流で得たことを活かしてより良い教習所をめざしたい

町田　敏（沖縄県）
馬天自動車学校・管理者

「全国自動車教習所教習指導員安全運転競技大会」には第1回目から、ずっと参加しています。毎年、教習所内で選考会を行い、優秀な成績の指導員を代表として送り出しています。

大会へ参加するもっとも大きな目的は全国の教習所の指導員が集まる場ですので、色々な教習所の方と親睦を深め、情報交換することです。他の県の教習所はどのような教習を行っているか、などを知ることのできる場はなかなかないですから、大会で新しい情報を得て、それを活かすことで教習所がどんどん良いものになっていくと思っています。

もちろん、指導員の技術の向上も目的のひとつです。第1回大会の四輪部門（縦列駐車／車庫入れ、フィギア）で優勝した当校の宮城洋一は、過去2回出場している選手ですが、「初出場の時は何がなんだかわからず参加して、そのレベルの高さに驚いた」と言っています。「しかも毎年、回を重ねる度にそのレベルが上がっている」とも話しています。彼は今年も出場しますが、早朝、教習が始まる前にコースを設定して熱心に練習しています。他の指導員が練習につき合うことも励みになっているようです。

その様子を見た、他の指導員にもやる気が伝わり、「自分も来年は出場したい」とお互いに切磋琢磨しあう、良い循環が生まれています。大会をきっかけに、そうして培った技術を教習生のみなさんにお伝えすることができることは教習所にとって大きな成果といえるのではないでしょうか。